

災害派遣活動を通して感じたこと

被災地を見て感じたこと

- ・ ニュースで見た状況が目の前にあった。どうしようもできない状況に歯がゆい思いがあった
- ・ 発災から 2 か月が経過しており、復旧するための復旧が終わっていたと感じた。実際に箕輪町で発災した際に数か月で物流、陸路が復旧できるか少し不安にもなった。
- ・ 輪島市の人口は箕輪町より若干少なく高齢化も箕輪町より進んでいる地域だったが、今後人口減少が進んでいく中で、震災が起きた際、箕輪町の人口の少ない地区が復興できるのか、そういった地域に予算を割くことにより優先度の高いところへ十分な予算を回すことができるのか考えて行かないといけないと感じた。
- ・ 輪島市、珠洲市の様子を見てきたが、建物内で地震に遭った場合は可能な限り屋外へ避難しないと行けないと感じた。(建物の上の階に逃げるなどの話もあるが、上の階ごと崩れてしまう場合もあるため)
- ・ 同じ輪島市でも建物の倒壊が酷いエリア、倒壊のないエリアが線を引いたように分かれていたのでハザードマップなどで危険な地区はできる限り住民に把握、周知をする必要性を強く感じた。

活動業務について感じたこと

- ・ 避難者へお弁当を配布する際、避難所への避難者への配布を優先するルールであったため在宅避難者に渡す分のお弁当が無くなり、断らなくてはならず、やりにくさや心苦しさがあった。
- ・ 業務としては体力より気力との戦いであると感じた。夜 20 時で業務時間の折り返しまで達していないことで心が折れそうになった。
- ・ また、食事は外部からの持ち込みであるため避難所での食事は避難者に見えないようなところでとるなど細かいところまで気を使う必要があり、常に気を張る必要があった。

その他

- ・ 業務にあたる前に誰のため業務、支援かわかっていなかったが、輪島市の職員さんと話す機会があり、「他県からの派遣される職員は避難所の運営にあたるおかげで市の職員が中での仕事をする事ができる」とおっしゃっていた。

このことから被災した自治体の業務の負担を軽減する意味合いが大きかったと感じた。

- ・ 輪島高校に避難されている方の多くは面識があまりなく、地域的にも市の中心部であるため住民同士のつながりの薄い地域であることが市の職員さんの話で分かった。
- ・ 避難所の運営自体は地域や避難者で運営することが基本であるため、行政が運営に関わる避難所は少ないようであった。
- ・ 防災面から、地域住民同士のつながりの重要性を感じたが、同時に行政からの支援の限界も身をもって感じた。
- ・ 当初、ブルーシートが被っている家屋を見てショックを受けていたが、徐々にその風景に慣れてきたことが非常に怖いと思った。